

近現代沖縄の三線を取り巻く状況について

園 原 謙¹⁾

Regards to a Situation that Sanshin Took Place After the Modern Okinawa

Ken SONOHARA¹⁾

Abstract

In this issue, I am going to introduce an article about sanshin's makers and the people who loved to play the sanshin. At first, a Ryukyu Shinpo's newspaper reported regarding the fact of sanshin's makers getting low salary in 1900. Secondly, it talked about establishing a union to prevent getting lower salary. The reason why the sanshin makers made a union was to make a movemet of Shamisen-kai party. In this newspaper, they also talked about the difference of sanshin's tones between the people from Naha and Shuri. Each competitor from Naha and Shuri played sanshin in front of a judge. There were at least three rooms in a house where the competition was held. In the first room, people were playing the sanshin. In the second room, there were twelve judges, and it was used to compare the sound of sanshin. And the last room was used to place the sanshin.

In later Meiji era, people that are from Naha, Shuri, and Itoman enjoyed the shamisen-kai party. Therefore sanshin makers were highly evaluated for making a good sanshin that has great tone. To make the sanshin have a great sound, sanshin makers pasted snake skins to the wood drum, caved in the drum to make many curves inside, and adjusted a stick and the drum. Since people were making money for amending sanshin with cheaper pay, they decided to stabilize the payment at the certain rate for repairing it. In my opinion, I verify that the syamisen-kai's movement that stabilized the payment was established by the union.

In 1939 before the World World II happened, Mr. Higashionna who was a Ryukyu historian held a sanshin kuyo (festival) and exhibition in Nan-den of Shuri-jyo castle. The famous sanshin from Naha and Shuri were displayed at the event. After the WW II people started off making the sanshin from the location called Kainan in Naha city. In 1953, there was a first sanhsin exhibition. A main sanshin maker's name was Mr. Matayoshi, Mr. Keida, and Mr. Kadena in Naha city, also Mr. Kyan from Awase, Mr. Teruya from Ishikawa, and also Mr. Miyagi from Sashiki.

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1.

Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, Omoromachi 3-1-1, Naha City, Okinawa Prefecture 900-0006, Japan

1 はじめに

平成25年度博物館企画展では「三線のチカラ」（平成26年2月18日～5月11日）と題し、三線の形の美と音の妙を考える展示会として企画した。いわば、三線のもつ形の美と音の妙、すなわち工芸的側面と樂器的側面の両方を論じることを主題とした。従来の展示会では、三線の型を重視し、どちらかといえば工芸的視点に傾いていたように思う。今回は、三線の音についての新しい知見^(注1)を入れることで、音を奏でる樂器としての三線の側面を強調、展開したいと考えた。

王国時代から営まれてきた三線樂や三線が、置県後140年を経た今日まで、沖縄の人々がどのように受容発展させ、継承してきたを示すことが本稿の主旨である。王国時代、数々の三線の名工たちの誕生し、今日においても依然として、南風原型、知念大工型、久場春殿型、久葉の骨型、真壁型、平仲知念型、与那城型の主要な7つの型が作られ続けている。これらの型が殆ど変化せず、踏襲され、名器の写しとして多くの三線ファンの支持を得て、未だに製作され続けていることは大変興味深いことである。

また本稿では、置県後の大きな世替わりの時代において、三線及び三線製作に係わる人々の状況を把握するために、戦前の新聞記事を中心に三線を取り巻く状況について紹介する。そこでは廃藩置県後の明治・大正の三線製作を生業としてきた人々やそれを嗜む人々の状況について垣間見ることができる。そのことはすなわち、近現代における三線自身のプロフィールだと思う。明治の世替わりという大きな社会変革を体験した明治の三線職人や三線を愛好した人々の考えを伝えることでできればと思う。また、今日現役で活躍する戦前生まれ（昭和初め）の三線製作者から戦前や戦後まもなくの三線製作の状況についての聞き取りの内容を紹介する。なお、本稿では、引用等以外の場合は、「三線」の用語を使用することとする。

2 明治時代の三線を取りまく状況

まず、新聞記事に記される三線製作者らの動きについて確認してみよう。本県の新聞発行の歴史は、明治26（1893）年9月15日の琉球新報を嚆矢とするが、戦後焼失したため、今日同紙で最も古いものとして確認される記事は、明治31年（1898）4月から

である。その中で、いくつかの興味深い三線に係わる記事を紹介する。

明治33年からの琉球新報の記事の中に、三線（当時は三味線^(注2)）に関する記事がいくつか散見される。その中で、三線大工（製作者）を取り巻く状況を把握することからはじめたい。

①「三味線大工の同盟」【明治33年10月25日の琉球新報（3面）】と題する記事には三線製作者の深刻な生活実感が示されている。

「三線大工は他の大工に比べて、賃金が最も低い。大工中、契約をして、賃金の引き上げ、もしその賃金より少なくして三味線を製造するときは、5円以上20円以下の罰金を徴収する。」というものだ。

この記事から次の事柄について確認・理解することができる。

- (ア) 三線製作の生業は、大工（セーク）の中に位置づけられていたこと。
- (イ) その大工のうち、最も賃金が低かったこと。
- (ウ) 同業者の中で、価格破壊が起きており、その実情を改善するために、5円～10円という懲罰金の規定を設けたこと。
- (エ) 「三味線大工の同盟」という組合のような組織が存在したこと。
- (オ) 三線の需要が高まっている、あるいは高まる可能性が示唆されていること。

82文字の新聞記事から、以上のような三線製作者の生活実態、価格が崩壊しないための業者間談合、その実効性はともかくも反則金の明示による抜け駆けの防止対策を講じようとする三線製作者たちの姿がみえてくる。ところで、罰金額の提示による違法行為の抑止力の効果が十分であったかが気になるが、当時の5円～10円の罰金額の相場は、どの程度のものであったのだろうか。当時、尋常小学校教師の月給が12円程度であった。地租改正の施行後間もない頃の話である。ペナルティは相当に高額であった。

②三味線大工同盟による広告【明治33年10月25日の琉球新報（4面）】には、具体的な手間賃が詳述される。

「三味線蛇皮張 手間賃40銭、上等ツーガ製造70銭、中等ツーガ50銭、下等ツーガ30銭、カラク

ヒ上等40銭、同中30銭、同下16銭、ブーアテ一度に付き10銭、トイ修繕20銭、歌口製造費5銭、上等馬2銭、上等シブ張20銭、同中18銭、同下16銭、糸掛上8銭、同中6銭、同下4銭 組合人中（原文のまま）」

この中に、三線の主役である棹に関する記述が一切なく、胴（チーガ）の製作やカラクイや歌口、糸掛け、馬などの付属品の製作及び調整手数料に終始している。今日私たちが最も大切だと理解する棹に係わる製作経費の話が全く出てこないのは不思議である。それは別格扱いで均一表示ができないためだと思われる。この広告は、値段表を示し、値崩れを防止するためのもの、賃金表を営業者と利用者の両方に明示することが目的であった。当時三線屋は個人営業である。したがって、手間賃は各人が適当に決めていたのであろう。ここでは、広告主は「組合人中」なので、ある一定の組合組織があり、三線屋全体の利益をめざしたものだ理解した方がいい。掲示された賃金は作業手数料である。個々の三線屋の裁量には、棹製作や蛇皮のチーガなど高価な取引材料が残っている。

さて、ここで仮に新作の三線1挺の製作依頼し、それが弾ける状態になるための調整手数料を試算してみよう。既述の料金に従うと次のとおりになる。

但し、ここでは、棹や蛇皮、糸の料金表示はされていないので、その分は除外する。上等ツーガを製作して、蛇皮張り料金とを合わせると、まず1円10銭になる。さらに、上等カラクリを3本一式で40銭（1本13銭）、上等糸掛けと歌口と上等馬の小パーツで12銭、トイ修繕して、ブーアテを一度行って30銭だから、上等ランクの手間賃は1挺あたり、しめて1円92銭と見積ることができる。棹は材質により値段は異なるため一律表示ができなかったと考えることができる。棹はピンキリで分からないのが実情であっただろう。ここに含まれていない蛇皮の値段は、輸入商品であったことから高額であったと思われる。

興味深いのは、ツーガ（チーガ）のやカラクイの製作で上等、中等、下等の3段階のランクがある。蛇皮張にはランクはないが、シブ張りにも同様に3ランクがある。ツーガの作りに上等と下等に40銭の

差異があるが、内部細工の複雑さによる手間賃による差か材質によるものかは不明である。また、明治の頃、ツーガの帯に鼈甲を使用していた可能性^{（注3）}がある。

ここで、話題を三線製作者から三線を愛用する人々に変えることにしたい。そこには三線に対する需要の高まりがあったことを示唆する内容が散見される。そのため三線大工^{さんしんせーく}の同盟がその時宜に既述の広告を広報したことの関連性が浮かぶ。三味線大工同盟の広告以前の三線を取り巻く状況は、変わりつつあったことが伺える。「三味線会の流行」があったからである。

③「三味線会の流行」【明治33年10月7日琉球新報（3面）】

「近頃那覇首里にて三味線会流行しているが、糸満村にて近日三味線大会を催す。」

この三味線会とは一体何だろうか。製作の技術の大会か、それとも演奏大会であろうか。この一文では不明だが、その答えは、翌年1月の記事に出てくる。

④「三味線会」【明治34年1月27日琉球新報（3面）】

「26日に那覇首里の重立ちたる人々が辻遊郭中道の神屋という処於て三味線会を開く。その弾合の結果は紙面の都合により次号に譲る。」

この小さい記事から次の事柄を知ることができる。

(ア) 那覇首里の重立ちたる人々が参加したこと。

(イ) 会を催す場所は、辻遊郭中道の神屋であったこと。

(ウ) 三味線会とは、三味線を弾き合うこと。

(エ) 単なる弾き合いによる鑑賞ではなく、結果が生じること。

2日後の記事には、三味線会が「雑報」として詳述される（図1）。

⑤「三味線会」【明治34年1月29日（3面）】

では、次のように三味線会の内容が詳細に報じられている。■は判読不可。

「史伝旧記を案する三味線は琉球より伝いとの云り。今日では他の楽器類を傾倒して花柳会^{（注4）}の全権を占め花の■月の夕高歌に宜しく低唱に宜しく。太鼓をドンとやっつけデンデン弾き出せば、乾坤一擲陰潜の御座敷の何時しか陽気となり沈々

●三味線會 史蹟記を案する三味線の琉球より傳
 へる云へる今日では他の樂器類を壓倒して花柳社會
 の余韻を占め花の朝月の夕の歌に宜しく低唱に宜しく
 大鼓をドンドコやツツけアツ／＼弾き出せば乾原一掃陰
 帶の御車敷も何時しか陽氣をもち沈々たる孤燈の陰誰
 やらの膝を枕にして音ゞめ一んみきと爪弾きすれば英
 雄豪傑も何のその心氣蕩菖五休忽ち海月に變する有
 ふ。誠に幽谷の潜絵を拝まし孤舟の婦を泣かむてふ
 樂器もかくやと思はる計りにていど目出度き鳴り者
 とモチハヤサレ居る也然らば沖縄はあはれ此の一小
 樂器三味線の故を以て喜ばれる者とも申すべく惜し
 内地に併行する者は最早種々の變化を受け鄭聲の淫
 調多けれども沖縄のは犬子ね東りの傑作の其の面影
 を存して却て周樂の遺音あり。沖縄人士の弄亦へな
 きにはあらずかし、儘、去五日第二回の三味線會は
 午後四時より辻は中道神屋に開きたり。首里那覇の
 名ある三味線久田屋富祖開鐘より當世作も取りま
 ぜ先ず二挺毎の彈奏へを始めぬ。彈手四人金武古堅
 (首里)、松山与那城(那覇)にて。審判員十二人別室
 に於て傾聴各投票をなし得点多きを勝ちとす。彈合
 の結果首里は二つの負けとなりぬ。中勝たるは、
 首里松山のヨナー、高嶺のマカベ、泉川のヨナー、
 神山のマカベ、那覇八屋嘉のカイジョウ、同タマ
 エー、同チネンダイコ、同イヒヤ小、山口のマカ
 ベ、長濱の名ナシなりき。而して負けたるは……
 ……皮の負けにて三味線の負けにあらず……と云
 う小言負けたる人々の皆異口同音賛成する所にて三
 味線に

図1 琉球新報 明治34年(1901)1月29日(3面)

たる孤燈の陰誰やらの膝を枕にして音ゞめ一んみ
 きと爪弾きすれば英雄豪傑も何のその心氣蕩菖五
 休忽ち海月に變する■有ふ。誠に幽谷の潜絵を拝
 まし孤舟の■婦を泣か■むてふ樂器もかくやと思
 はるる計りにていど目出度き鳴り者とモチハヤサ
 レ居る也然らば沖縄はあはれ此の一小樂器三味線
 ぐの故を以て喜ばれる者とも申すべく惜し。内地
 に併行する者は最早種々の變化を受け鄭聲の淫調
 多けれども沖縄のは犬子ね東りの■の傑作の其の
 面影を存して却て周樂の遺音あり。沖縄人士の■
 弄亦へなきにはあらずかし、儘、去五日第二回の
 三味線會は午後四時より辻は中道神屋に開きた
 り。首里那覇の名ある三味線久田屋富祖開鐘より
 當世作も取りまぜ先ず二挺毎の彈奏へを始めぬ。
 彈手四人金武古堅(首里)、松山与那城(那覇)
 にて。審判員十二人別室に於て傾聴各投票をなし
 得点多きを勝ちとす。彈合の結果首里は二つの負
 けとなりぬ。中勝たるは、首里松山のヨナー、高
 嶺のマカベ、泉川のヨナー、神山のマカベ、那覇
 八屋嘉のカイジョウ、同タマエー、同チネンダイ
 コ、同イヒヤ小、山口のマカベ、長濱の名ナシな
 りき。而して負けたるは………皮の負けに
 て三味線の負けにあらず………と云う小言負
 けたる人々の皆異口同音賛成する所にて三味線に

負けにあらずとなり去れば■負けなる皮を記すべ
 きなれど記者不粋一々皮の名知らず皮負けは茲に
 略することになし(右終て後は樂合奏今日のふく
 らしやや和氣洋々として春風滿堂に生じ主客献醉
 各歡を尽してならば別らの余情を割れひて散会せ
 しい夜に更にも程近からさ。)

この三味線會は実に興味深い。確か、昭和14年に
 東恩納寛淳が首里城南殿で開催した江戸与那の供養
 祭では、首里那覇の名器が陳列に供されたが、その
 際には、爪弾くことがないようにとの各家からの注
 文が入ったほどであった。この明治34年の三味線會
 はそれより40年前の話で、置県後28年を経ての頃
 の話である。これら三味線會記事から読み取れる興
 味深い事実と内容等について、次の通りまとめた。

(ア) 三味線會の流行の時期について

明治33年10月記事に掲載され、従来首里那覇
 で行われたが、糸満でも開催された。

(イ) 三味線の弾き合いは一度に数多く行われた。

首里那覇の名器久田開鐘や屋富祖開鐘に加え
 当世の新作も混ぜての三味線の彈合であった。

(ウ) 三味線の彈手

彈手は四人で、首里側が金武と古堅、那覇側
 が松山と■■城(与那城か?)であった。そして
 各人によって、2挺ずつ彈合った。

(エ) 審査員がおり、勝負事であった

審査員は12名で、別室で傾聴毎に投票により審査を行い、勝負は得票が多いもので決した。

(オ) 勝負の結果は那覇が勝った。

「勝負の結果は首里が2つ負けた」と記されている。那覇が2つ勝ったことである。

(カ) 勝った三線は次の通りであった。

勝った三味線は首里4挺、那覇6挺でそれぞれ呼称が記される。次のとおりである。

首里・・・松山のヨナー（与那城型）、高嶺のマカベ（真壁）、泉川のヨナー（与那城型）、神山のマカベ（真壁型）、

那覇・・・屋嘉のカイジョウ（開鐘）・屋嘉のタマエー（タマイ真壁型）、屋嘉のチネンダイコ（知念大工型）、屋嘉イヒヤ小のマカベ（真壁型）、山口のマカベ（真壁型）、長濱の名ナシ（型名不明）

(キ) 10挺の勝ち組の三線があった。

2挺ずつ弾合うルールであったので、合計20挺の三線がエントリーしたことになる。

(ク) 負けた三線について

負けたる三線について、所有者らは「皮の負けで三味線の負けではない。」と報じられる。

以上のことがらがこの記事から読み取ることができる内容であるが、この記事から読み解くことができない疑問点を次に列記し、私見を述べたい。

(ア) 首里と那覇の弾手は両区を代表する名手であったか。また、どのような曲を弾いたのだろうか。

うたは唄っていないのではないかと考える^(注4)。三線の弾き合いと記されているのがその理由である。

(イ) 審査員12名の資格や首里・那覇の審査員の構成はどうであったか。また、その音の審査基準はどのように設けられていたか。

首里那覇は6名ずつ選んだ可能性がある。6名の構成は実演家、所有者、知名士などが想定される。評価基準の明文化されたものはなく、個々の認識に基づいての評価が行われたと思う。

(ウ) 三味線会を行う会場の条件はどのようなものであったか。

三線の所有者の控え室、演奏の間、審査員が

控える審査室、少なくとも3室を持ち間仕切りが必要であった。ある一定数の部屋を要する施設が必要である。ここで登場する辻中道の神屋という店はその条件を満たしていたことになる。

(エ) 街の名誉をかけての対抗試合が行われたか。

首里と那覇の対抗試合で那覇が勝った。糸満での開催は、首里か那覇の名器が糸満に出張して、糸満の名器と三線勝負を行った可能性がある。当時、首里、那覇、糸満、与那原は大きな街で富裕層が多くいた。三線の所蔵者には医者が多くいた。

(オ) この三味線会の主宰者は一体誰であったか。

三線製作者か三線演奏家か、それ以外の趣味人か。記事で「首里那覇の重立ちたる人々」が参加したとされているので、名家の人々か。その門外不出の名器三線も参加していることから首里の場合は旧御殿殿内の人々をはじめ、那覇の名家など一定の知名士が参加していたことが考えられる。そして、彼ら門外不出の家宝を引っ張りだすことのできる会の主宰者は、大物で地域に影響力を持つ人材であろうと推察される。

また、明治34年（1901）3月17日の記事「諷叢三味線会」では、既述の記事に係わる感想の歌が5点記されている。三味線会の模様を描いており、興味深いので紹介する。

弾きくらべくらべ ひきよる三味線の清てたと音や美代のしるし 辻仙

首里那覇にとよむ三味線寄せて ひきくらべくらべ ひくが嬉しや 辻仙

歌や三味線も時々やよたしや いつもてんてんや我身やすかぬ 島張飛

三味線の音に千代の願いこめて 遊び楽みゆる御代の嬉しや シゲノブ

首里那覇の主の前揃やしまちいへまず 首小傾んちよて弾ちやひ聞ちやひ 隋席老妓

いつも金禄のあんどもて馬鹿が 歌や三味線に飲んだ食たひ 遊歩生

また、時代は少し下るが明治43年（1910）3月23日「三味線会傍聴ノ記」には、音の聞き比べでなく、演奏会になっている。

沖縄の人々の間、特に首里区や那覇区、糸満など比較的富裕層が多くいる街で、三味線会が流行して

いた。その中で、善く鳴らすための三線大工の需要が高まっていた。音を善く鳴らすためには、蛇皮張り、チーガの質、ブーアターの調整など三線職人の高い技量が求められる。三味線会が流行するに伴い、職人たちの競争が激化し、組合人中による工賃の一律化の必要性が求められたことが、最初で紹介した新聞記事の内容になったものと考えることができる。

3 大正・昭和（戦前）の三線を取り巻く状況

昭和11年（1936）に県内初の独立した建物として首里城内の北殿を改築して設立された沖縄県教育会附設郷土博物館には、昭和14年（1939）に刊行された収蔵資料目録によれば、約5千件の収蔵資料を保管していた。昭和14年（1939）に東恩納寛淳が東京の古書市で発見した薩摩島津家から流出した江戸与那の里帰り供養のために、三線供養祭が開催された。廃墟と化した首里城南殿を片付けて会場が設営され、首里那覇の名器も出品された。その後、東恩納から江戸与那は郷土博物館に寄贈されたが、しかし沖縄戦後行方不明になり、昭和27年（1952）の池宮輝喜のハワイでの三線調査で、この三線が発見された。その江戸与那の返還のためにハワイを訪問した東恩納の説得により、翌年にもどり、昭和33年（1958）に江戸与那は当時の民政府立首里博物館に寄贈され、琉球政府の指定文化財になった。

親泊さんの証言によると、東恩納先生は、本物の江戸与那は博物館へ寄贈するため、その型の複製品を又吉三線店（又吉昌裕）に依頼したという。江戸与那には、東恩納が戦後又吉三線店に製作してもらった三線がもう1挺あることになる。

大正から昭和初期にかけて、第1次世界大戦による砂糖需要と高騰により沖縄の農家は換金作物としての甘蔗栽培へ転換することになるが、大戦後ヨーロッパ諸国の植民地における甘蔗栽培が復活することで、特需はなくなり、砂糖は大暴落し、沖縄の人々はいわゆる「ソテツ地獄」と形容される貧困に喘ぐことになる。その頃、三線バクヨー（仲介者あるいは斡旋者）によって、大量の三線がハワイをはじめとする移民先に流出することになった。戦後数年後の池宮の調査によると、ハワイには約3,500挺の三線があったことが確認されている。その中には、沖縄戦後、戦利品として不法に国内外へ渡った三線

も含まれている。

5 昭和（戦後）の三線を取り巻く状況

沖縄戦後、沖縄居住の人々は本島内においては、13の住民収容所に収容されたが、収容所の中では、戦後の三線が製作されはじめた。棹は適当にあり合わせの棒きれに糸蔵を設け、糸巻（カラクリ）の穴をあけ、胴は米軍の大きな缶を表と裏の丸面が使用できるよう半分に切り、糸はパラシュートの糸を用いて、カンカラ三線が誕生した。

戦前辻にあったといわれる又吉三味線は戦後、那覇の開南通りに店を構え、その他の三線職人たちも那覇の開南あたりに店を構え営業したとされる。

戦後も8年を経た昭和28年5月には、三線新作の展覧会が開催されるようになった。当時の三線製作の状況が池宮喜輝の「琉球三味線作家に望む」（『琉球三味線寶鑑』47-48p/昭和29年7月5日発行）に記される。

「これからの作家に要望するところは、量より質本位にして、昔の名工にもおとらぬ作家の出現を待望している次第である。然して戦前即ち大正昭和の頃の作家に比較すると、その技に於いて確かに進歩していると思われる。けれども之を昔の南風原、真壁、與那の作品に比べると、まだまだ問題にはならず、日暮れて道遠しの感ぜざるを得ない。そこで名器作出に関し僅か愚見を述べ参考となれば幸甚である。元来、三味線は楽器である以上、鳴るのが主であり姿は従となる。然しこの鳴ると云うことを知るには、是非正確な音感を持つことが絶対に必要である。その音感を養成するには、自ら進んで或程度の古典を学ぶと共に、音楽の大家と提携して作品に対する批判を乞うことが最肝要だといえる。目下沖縄の作家中には三味線の良否を作って見た人がわかるので、作って見ない人に解る筈がないと云う、不謹慎極まる言動を敢へてなすもののあるやに聞くが、これは自らその不明を暴露した笑止千万は話しと言わざるを得ない。三味線の男絃中絃女絃三つの中で一番鳴らし難いのは男絃である。」

池宮喜輝は、戦後いち早く県内外の三線の所在調査を実施した琉球古典音楽野村流の師範である。昭和28年（1953）の琉米文化会館（崇元寺）において三味線供養を開催している。同供養の様子は、写真

の中に記される。これらの三線がどのような由緒のものであるかは判然としないが、安富祖流師範古堅盛保、池宮喜輝、野村流師範幸地亀千代が供養祭の演奏を行っている。その中で、同書には、「新作の部」として8人の所有者が掲載されている。これら三線の製作については、所有者か製作者かは不明のものもあるが、次の通り8件が紹介されている。その際に、新作の部の検査証が発行されており三線とその証書が現存する（写真1～3）。

「又吉昌裕（那覇市7区1組の4号）真壁型、慶田（那覇市7区1組の4号）真壁型、喜屋武長盛（泡瀬1区5班）與那型、伊波義雄（那覇市4区9組）與那型、伊波盛松（石川市1区6班）真壁型、宮城春善（佐敷村馬天）江戸與那型、屋良朝智（石川市8区4班）真壁型、照屋勝市（石川市4区2班）真壁型」

このうち、三線製作者は、那覇市内には又吉、慶田、嘉手納がおり、中部に泡瀬の喜屋武、石川の照屋、そして南部の佐敷には宮城がいた。那覇在住の伊波は「ティガーヌスー」とよばれ三線バクヨー（三線売買の仲介者）としても有名であったという。

また石川在住の伊波と屋良の作品は石川で三線店を営んでいた照屋勝市の作品であったという。

戦後少なくとも10年以内に既に店を構えた三線店は、同書の「広告欄」からみると、琉球三味線作家組合なるものが設立されており、「組合長喜屋武長盛、相談役又吉昌裕、役員並に組合員一同 那覇市」とあることから、既に数件以上が存在していたことがわかる。同書には、2つの三線屋の広告が確認できる。参考までに、昭和29年（1954）当時の三線の広告内容をみてみよう。

●創立70年の古い歴史を有す

- 一 高級三味線 優秀琴
- 一 音色良く優美堅牢材料豊富最優秀の技術者が入念に製作せる三味線なれば御安心の上当店にて御買求め下さい

其の他附属品販売並に蛇皮線張替

那覇市七区一組四号 又吉楽器専門店 店主 又吉昌裕

●三味線の御用命は!!

真和志市与儀区530番地（与儀交番所隣）

嘉手納三味線店（元南洋テニアン町）



写真1 戦後琉球三味線組合が実施した新作の部に掲載された 照屋勝市作の真壁型（個人蔵）〔左〕。

写真2 同検査証（個人蔵）〔右上〕、写真3 三線の棹に押印された組合印〔右下〕

少なくとも、上記6人の三線製作者に加え、真和志市與儀区に嘉手納三味線店があったことが確認できることから、戦後10年以内に少なくとも7つの三線店があったことになる。

6 聞き取り調査による戦後の三線づくり

現役で活躍する県工芸士のうち、戦前生まれの職人を中心に戦前あるいは戦後の三線づくりの状況について聞き取り調査を行った。

戦後間もなくから60年以上の三線製作一筋のキャリアを有する親泊宗康氏（県工芸士）は、昔ながらのクサビ張りによる蛇皮張りこだわり続ける一人で、戦前の伝承や戦後の製作の状況について精通している。

戦前北部（名護）で生まれた親泊宗康さんは戦後まもなく13歳で、那覇の又吉三線店に弟子入りをしたという。又吉楽器専門店は、戦前はメヌモー（現在の西武門）にあったようで、元々は糸数姓を名乗る王府時代から300年の歴史を有する家だと、店主はいつていたようだ。沖縄戦で、上之蔵の三線店は焼失し、戦後は開南に移転新築し店を構えた。この開南通りには、同三線店以外に、仲本、伊舎堂、大嶺、嘉手納、金城、慶田の三線店があったという。現在は仏壇通りと呼ばれるこの一帯は、戦後まもなくは「三線通り」とも呼ばれており、三線屋が軒を連ねて活気を呈していたようだ。

又吉三線店の職人は、「親方」とよばれた店主と親泊さん以外に2人の弟子がいて4人で製作、販売を行っていた。三線職人の技の習得については、住み込みの弟子修行が行われ、1年目の修行は糸かけ、カラクイ作りが主であったという。カラクイの花部分は、柄の部分を黒檀、そして飾りの部分は白色でアクセントを付けるが、その材には牛骨を用いたようだ。その牛骨の油抜きが大変な作業で、一日中木灰で煮て作ったという。その残った時間で、棹づくりの荒分け（アラワチ）作業を手作業で行った。当時は電動の糸鋸があったわけではないので、すべてが手作業で、手カンナで削って棹の形状を整形していった。その作業は大変な重労働であったという。

師匠からは直接三線の棹づくりを手取足取り習ったわけではなく、師匠の製作状況を見て三線製作づくりを学んだ。弟子入り5年目からは、チーガの胴

杵作りを行った。蛇皮を張る作業は、又吉のオヤジ（昌裕）が行ったという。又吉三線店は木造2階建てで、2階の部屋で蛇皮の選別作業をオヤジさんとよくやったという。蛇皮はA級からC級までに分け、又吉三線店では蛇皮の卸業も行っていたようだ。

蛇皮は高級品であった。戦後まもなくの頃、首里区（現在は那覇市首里）の土地の値段は1坪あたり2ドル程度で売買されていたのに対し、蛇皮は1匹（長さ約3.7m程度）で20ドルもの高値で取引されたという。1匹で表裏を張り約4挺分の蛇皮張りチーガができるので、1挺あたり5ドルの蛇皮張りチーガは高価であった。これら蛇皮は、香港あたりからの輸入品だったと記憶しているという。

三線店の住み込み職人の一日の生活を聞いてみた。

午前7時30分から店の掃除と鋸や「ティー」と呼ばれる木を削るための刃物や道具の研ぎ出し作業から始まった。就業時間は午前7時半から午後6時まで。弟子入りの最初の1年は無給であった。2年目からは日当が20B円、食事は1食だけ付いた。当時、いわゆる女中職は3食付きで、20B円だったので、女中職より待遇が悪かったということだ。

また、三線の棹材で珍重されたクルチ材は、那覇では奥武山一帯にあったという。一説によると、蔡温による植林施策によって奥武山一帯にクルチが繁茂していたという。戦後、軍作業をしていた人が又吉の店に大きなクルチ材を売りにもってきたことがあった。彼らは奥武山から採ってきたとのことであった。沖縄本島のものは植林によるもので、それ以外に殆どなかったが、八重山には群生林があったという。

親泊さんの三線製作の極意のうち、蛇皮が重要な作業である。型取りをし、布張りをした蛇皮の上に乗りかかるとに体重をかけ、皮の張力を伸ばしきって、クサビで調整をしながら張る技術である。この段階で、傷がある蛇皮ははじかれ、耐久性の高い蛇皮が張られることになる。長年の勘で、お客さんが求める音の高さや長持ちするチーガづくりに定評がある。三線の音を規定するのは、チーガが大きく占めるという考え方をもつ。その棹とチーガの音に影響を与える比率は、棹3に対してチーガ7の割合

が、親泊さんの持論である。

クルチが三線の棹材として珍重されることは、「神木」として理解されていたことによると、池宮喜輝が親方に話していたという。沖縄では1年に1回、家の4隅を時計回りに回って、神酒と塩と米の供物を捧げ、家内安全を祈願する屋敷ウガンを執り行う慣習がある。邪悪なものが角から入ってくるという教えがそこにはあるが、そこで、クルチを家の四隅に植栽すると、屋敷ウガンが不要なほど邪悪なものを払う力があるとのことだ。クルチがとりわけ三線材としても偏重される意義に堅牢度の高さや狂いやひねりがないとの説明に加えて、神木として民俗学的信仰に基づいていることを加味すると、三線材にクルチを一番と考える人々の三線観がより一層理解できる。

ハワイでの聞き取り調査でよく出るのが、野村流大家の幸地亀千代の武勇伝が残る。沖縄での本家の先生がハワイの弟子たちのために長期滞在して、指導するというものである。そのレッスン料は破格であったと聞く。戦後の三線職人らは、幸地や池宮などを通して三線を求めたという話もよく聞く。三線を弾くことが生活のひとつである実演家自身が三線売買における広告塔になったのである。先生方にはそれぞれに気心が知れた信頼できる三線職人がいた。

先般亡くなられた米国の人間国宝の仲宗根盛正は野村流ハワイ支部長も務められた方だが、古三線のコレクターでもあった。沖縄の古三線の売買の話題は、県系の小さなコミュニティ社会ではあつという間に伝わったようだ。また、戦前、ハワイに渡った古三線が、戦後沖縄の実演家が財力をつけて、再び沖縄に買い戻した話もある。

現代の名工（県工芸士）といわれる銘苅春政氏は、沖縄戦の激戦地の南部の前川の出身である。奇跡的に家族全員が戦禍を免れたという。戦後は、大工（セーク）で生計をたて、ティグマー（器用）で、三線製作の道を歩んだという。三線製作のみを生業とすることは大変なことである。三線製作者は、沖縄県民と三線を愛好する国内外の人々のサポートによって生計が維持されている。その需用と供給は戦後の一時期まで適当なバランスで維持されてきた。

7 結びにかえて

本稿では戦前や戦後まもなくの三線製作者の状況についての記録を残すことにした。平成24年11月30日、再結成された沖縄県三線製作事業協同組合の申請に基づき、沖縄県は県工芸産業審議会の答申に基づき、三線を沖縄県の26番目の伝統工芸製品に指定した。同組合によると、県下には40余の三線製作店があるとされるが、現在（平成26年2月末日現在）の加入組合件数は20軒だという。この伝統工芸製品の指定に伴い、県の工芸士が7名認定された。今後、県指定の無形文化財（工芸技術）や国の伝統的工芸品の指定など、同組合の課題と挑戦はその端緒についたに過ぎない。なお、一層の組合員同士の意識啓発や県外産に対抗する一層の手技の向上など三線製作者及び組合に課された課題は多い。この機会に、沖縄県産三線に対する県民の理解を促進し山積する課題解決のための一致団結が求められる。

振り返ってみると、三線製作を行う職人たちは、王国解体以降、三線づくりの伝統の手技を守るための組織づくりに尽力してきた歴史がある。また一方で、組合員同士の利害や不一致、争い、あるいは戦争などの様々な社会的要因で、組織の結成と解散、離散を繰り返してきた歴史もある。

一方、三線自身に注目すると、明治以降の歴史において、沖縄にある三線にとっての受難が少なくとも3回はあったと考える。1回目は、いわゆるソテツ地獄といわれる大正から昭和初めにかけての時代である。多くの家宝として保持されていた三線が元の所有者の手を離れ、移住地等へ流れ出た。ハワイ、北米など移民先での三線需要が高まったことが一因として挙げられる。厳密にいうと、受難という表現は適当でない。むしろ三線の世界的な拡散、文化の伝播、文化財の疎開、あるいは文化的遺物としての保全として取り上げられる必要がある。この脈絡では、代々継承してきた旧家の家宝三線としての性格付けが損なわれたという意味として理解していただきたい。

2回目は沖縄戦における受難であった。首里・那覇の街は殆どが破壊された。着の身着のままで逃げ惑った人々は、位牌と家宝の三線棹だけを背負ったという話も聞く。また、北部等の疎開生活の中で、貴重な三線を食料調達の糧にした話も聞く。そして

3 回目の受難は意外にも現代といえるかもしれない。国際化、海外の廉価な労働力によって海外産の三線が誕生することとなった。一定の品質と安さ、大量の商品生産力を武器に県内三線職人の市場と競合する状況があることは歪めない。消費者の立場から、三線が廉価で世界中に広がることは意義あることで、新たな市場の発掘といえ、市場の競合はないこととなるが、事はそれほど単純ではない。数百年続いてきた手技の伝承が途絶えることが、実は最大の受難であり、危機なのかもしれない。

21世紀を生きる私たちには、沖縄の伝統楽器である三線を守り育てていく責務がある。世替わりを体験した明治時代の人々も、廃墟の中から立ち上がった戦後沖縄の人々の場合も同様であった。三線文化を一製作者の死活問題で片付けるのではなく、社会全体の文化的アイデンティティの継承発展の点からどうすべきであるかというマクロの視点で考える必要がある。歴史・文化を継承する博物館（資料のタイムカプセル）が「三線打ティーワジャコンテスト」^{（注5）}を試みる理由がここにある。

琉球王国時代の影響が残る明治の時期、人々は三線の音に拘った楽しみを持っていた。家宝三線の鳴らし比べ、名器の鳴らし勝負という三味線会や競鳴会があった。三線の音色を競った歴史である。私たちは明治時代から楽器としての三線の音色を楽しみ、評価することができる聴く力があつた。そのことが三線文化の潜在力ではないかと考え、この機会に本場職人の三線の音の繊細さを演出する手技と形の美の追求をお願いしたい。

謝辞

本稿を作成するにあたり、沖縄県三線製作事業協同組合の渡慶次道政理事長、仲嶺幹事務局長をはじめ親泊宗康さん、銘苅春政さんには多忙の中で、聞き取り調査に参加いただき、ご協力いただきました。とりわけ事務局長の仲嶺幹氏には、御自身で三線製作者の系譜を調査しており、いろいろとご教示をいただきました。また、照屋勝武さんからは、多忙の中、三線づくりの師でもある父親の照屋勝市さんが当時製作した三線探しに奔走いただきました。関係各位へ重ねて感謝を申し上げます。

注記

注1：2012年度の沖縄県対米請求権事業協会の研究助成事業として「三線の型の正型と名器の音色分析」の中で、ナイロン絃と絹絃、胴（チーガ）内部の細工の有無、文化財三線と新作三線の棹の違いなどによって、音色の差異をどのように感じるのかの聴取実験を160名の方々の参加のもとで実験した。その結果、指定文化財盛嶋開鐘の棹と同開鐘写し（新作）の実験では、盛嶋の音色が「よい音」との評価をいただいた。また、人々の三線の音色に対する嗜好は、時代によって異なることを確認できた。

注2：本文中の「三味線」は、平成6年の三線の文化財追加指定までは、文化財指定の名称としても「三味線」を使用していたので、引用については当時の原文のままで使用することとした。

注3：王国時代の絵図をはじめ実物で最も古い三線（徳川美術館が所蔵する琉球楽器21点の中に含まれる）は、带状に鼈甲が使用されていることが確認される。また、東京国立博物館が所蔵する明治時代の三線にも同様に鼈甲が使用される例がある。手当て（ティーガ）といわれるものは、その次に布製が古いと思われる。現在、一般的には、ビニール製や布製が使用される。

注4：2012年の聴取実験の際に、瀧落としとかぎやで風節の2曲ずつ収録したが、三線の音色の実験では、その歌持の演奏部分を切り取り、三線の音色の比較を行った。歌を入れると、声楽の歌のうまさに関心がいつてしまう恐れがあり、客観的に三線の音色の比較ができないと考えたからである。

注5：県内三線製作を生業とする職人を対象に、三線の形と「善い音」の2つの面から審査を行う初のコンテストで博物館が主催する。審査の基準は、沖縄の伝統的な主要な七つの三線型に加え、一般的な三線観にも基づいた斬新な型も含んだ三線で、三線の形の美（天、野、鳩胸、チーガの仕上り、棹とチーガのバランス、カラクイの形とバランス、全体の形のバランス）を審査し、さらに三線の音の妙（心地よさ、重厚感、余韻、音量、音のバランス、艶、透明感）及び弾き具合（音階3の音 / B）を含め総合的に審査し、県知事賞、県議会議長賞、県教育委員会委員長賞など8つの作品を表彰する。

参考・引用文献

琉球新報 1901、1910 記事

東恩納寛惇、1954「序」『琉球三味線寶鑑』（東京沖縄藝能保存会）

東恩納寛惇、1954「三味線考」『琉球三味線寶鑑』（東京沖縄藝能保存会）

池宮喜輝、1954「琉球の三味線」『琉球三味線寶鑑』（東京沖縄藝能保存会）

沖縄県立博物館編、1988『特別展三線名器100挺展（図録）』（沖縄県立博物館）

沖縄県教育委員会編、1993『沖縄県文化財調査報告書第110集 沖縄の三線—歴史資料調査報告書Ⅶ』（沖縄県教育委員会）

沖縄県教育委員会編、1995『沖縄の文化財Ⅲ 有形文化財編』（沖縄県教育委員会）

宜保栄治郎、1999『三線のはなし』（ひるぎ社）

園原 謙、1999「沖縄県指定文化財としての三線」『特別展三線のひろがりと可能性展（図録）』（沖縄県立博物館）

園原 謙、2000「沖縄県の文化財保護史—昭和初期から琉球政府時代の活動を中心に—」『沖縄県立博物館紀要 第26号』（沖縄県立博物館）

園原 謙2013『（社）沖縄県対米請求権事業協会・助成シリーズ47 三線の型の正型と名器の音色分析』（琉球三線楽器保存育成会）

沖縄大百科事典刊行事務局編、1983『沖縄大百科事典』（沖縄タイムス社）

バグハウス編、2009『琉球楽器復元調査製作業務報告書（基礎資料編）』（財団法人海洋博覧会記念公園管理財団）

岩宮眞一郎編、2010『音色の感性学—音色・音質の評価と創造』（日本音響学会）

沖縄県教育庁文化財課編、2011『文化行政要覧～平成23年度版～』（沖縄県教育委員会）

